

<読者投稿>

## 川越市の現状を嘆く

(2015年5月2日)

埼玉県議会議員選挙での川越市の結果は、トップが公明党の福永氏で日頃の働きが票に出ましたね。後は税金の無駄遣いに等しい人たちですね。川越市議会議員選挙も驚くべき異変が起きました。保守王国の川越に共産党候補者がトップ当選したのです。共産党五議席の進出は、川越市の行政運営がどれほどに乱れているかを示すものです。川合市長のリーダーシップの欠如が市民の危機感を呼び、働く共産党に票が流れた現実を軽視できませんね。それはそれとして抱腹絶倒、悲喜こもごもの選挙でもありました。

ご承知の通り川越市長は川合善明氏です。平成21年の選挙時は前副市長であった細田照文氏との一騎打ちで勝利し、初当選となったことは記憶に残っていると思います。

この平成21年の選挙では、栗原博司川越市自治会連合会会長が細田照文氏を支援。当時、あらゆる場所で「俺（自治会連合会）がついているから細田さんの当選は間違いない」と豪語し、対立候補である川合氏の選挙カーを見るたびに罵声を浴びせていたのは有名な話でした。

川合氏が市長に就任後、「栗原氏を自治会連合会会長から下ろすべきだ」という川合派から多くの声が上がりましたが、川合市長はこの件を黙認し栗原氏の会長は留任となりました。

よくある役所内の話ですが、新市長誕生後の人事では対立候補側の息のかかった職員は、軒並み冷や水を飲まされたり、出世コースから外されたりと表には出ない「暗黙の人事」があるのですが、この時のように対立候補であった細田氏の支援をした栗原氏を自治会連合会会長のままに留任させるということには、多くの人たちが驚きました。市の職員ではないからなのか、それとも何か裏があるのかと、当時は多くの者が首を傾げたものでした。

しかし、現在では川合市長と栗原氏は極親密な仲であることは、関係者の間では知らない者はいません。

その理由は、今回の川越市議会議員選挙が近づき「なるほど」と誰もが納得するような話が浮上してきました。

まず、栗原氏の息子さんの栗原瑞治氏が市議会議員に立候補するということ。そして、栗原博司氏と川合市長との話があります。

栗原氏は川合市長に対して「今回の市議会議員選挙で倅をトップ当選させてほしい。そうすれば3期目のあなたの選挙を応援する。市長として、もう1期をやってもらい、その後には倅に市長をやらせたい」という耳を疑うような話でした。また、4月1日付の人事の件でも川合市長と栗原氏は話し合ったということでした。

まず市民部長であった木島宣之氏を副市長として、そして市民部参事の細田隆司氏が秘書室長に就任するというものでした。後日、人事が発表され、木島氏の副市長就任は川合市長は議会の根回しができず実現しなかったものの、細田氏の秘書室長は情報通り一致しました。栗原氏の人事情報を聞いていた者は、皆顔を見合わせたといえます。

また、栗原瑞治氏の選挙公約や政策は木島氏が作成しているという噂まで立つ始末です。これが事実であるならば木島氏の副市長はバツです。市の執行部が新人議員の立候補に係る文章の作成は違法だからです。

ここで、なぜ、栗原氏・木島氏・細田氏という名前が出てくるかを説明します。まず、栗原氏は自治会連合会の会長です。そして木島氏はこの自治会連合会関係を所管する市民部の部長。細田氏もまた、自治会連合会の事務局を務める人物です。自治会関連のことで、栗原氏は木島氏や細田氏とは顔見知りどころか、仲は親密です。

このように自治会連合会の関連事務を所轄する人物をまとめ上げ、自分の倅を市議会議員へ、そして後に川合市長の後釜に据えようと企んだのは、栗原博司氏以外にはいるはずがありません。そして自分の倅が市議会議員に当選すれば、川合大政翼賛会の一員となるのでしょう。栗原瑞治氏は、当選していれば川合市長の後継者です。それは当選すればの話です。この話は選挙の前から市議さんたちの間に流れていました。栗原氏は既に倅の瑞治氏のトップ当選を公然と豪語していましたからね。市議さんたちはどんな気持ちだったのでしょうか。栗原会長は既に自分が権力の座に坐ったつもりでいたのでしょうか、このような輩共に川越市を牛耳られているとは、川越市民として惨めを通り越して怒りさえ覚えたのですが、栗原瑞治氏は落選でした。大恥をかいたのは、裏でこそこそやっていた川合・栗原ラインで、これで栗原博司氏は川越市自治会連合会会長は終わりですね。この人は思い上がりの強い人だったようですね。木島氏もとんでもない茶番劇に巻き込まれたようです。

今回の人事で副市長に就任すると言われていた木島宣之氏は、性格的には人間的魅力のある男です。現在の川越市役所の中で副市長有力候補者であることは間違いないと思っていましたが、去年の夏頃から、奥山副市長の後任として木島氏が次期副市長になるのではという噂が流れていました。元々、川合市長は木島氏のことが「嫌い」という話もありましたが、川合市長の後援会の母体でもある中央ロータリークラブを中心に、小江戸マラソン大会やアマチュアジャズフェスティバルを立ち上げたという木島氏の実績を評価する声が上がリ、また、中央ロータリークラブには早稲田大学を卒業した人間が多く、稲門会メンバーとして後輩の木島氏を副市長に就かせればいいのではないかという声が上がったと考えられます。そして、川合市長の後援会の中心である中央ロータリークラブや稲門会メンバーに、木島氏を副市長に推薦すれば、木島氏のことが嫌いでも川合市長は断ることが出来なかったのだろうという話でした。

また、川合市長は退職する奥山副市長の後継者として木島氏を副市長に据え、疎んじる風間副市長の追い落としに利用しようと考えていたようです。

木島氏と風間副市長は、元より犬猿の仲です。こうした人事を川合市長と栗原氏は仕組んだとしたら両氏は質が悪いですね。

しかし、結果として4月1日からの木島新副市長の誕生はありませんでした。川合市長が「木島を副市長にする」と言うだけでは簡単に就任させることはできません。副市長の決定は議会の同意案件なので、議会開会中に議案として提出しなければいけません。慣例では議会最終日に提出されることとなっています。平成27年3月議会最終日の3月17日に木島氏を副市長にするという議案は提出されませんでした。

議会最終日、確認のために開催された議会運営委員会で追加議案の有無を問います。議会運営委員会の正副委員長が風間副市長のところへ確認に行くと、「市長が人事案件を出したがっている」との返事をもらい、正副委員長は「市長からの連絡を待ちましょう」と風間副市長のもとを引き上げました。

その後、議長である新井喜一氏が市長に呼ばれ、そこでどのような話があったのか判りませんが、普通なら川合市長と新井議長との折り合いが付けば、新井議長が川合市長の所から戻って来た時に、木島副市長の就任は決定していたと思います。

川合市長は自身のことすら議会で決着を付けていないのに、新たな副市長の根回しもできず、栗原会長と秘密裏に取り決めた件で議長の承諾を得ようなどとは虫の良すぎる身勝手な行

為ですよ。新井議長が川合市長との対談のあとの沈黙は、そのことを物語っていると思います。

川合市長は去年の12月議会で出された決議のこともあります。川合市長は自身のことや後援会の責任の取り方を未だに明確にしていません。今年の初めに亡くなられた舟橋功一前市長と比較するわけではないのですが、川合市長は議員との対話が少なく自分の要求だけを押し通すということをよく耳にします。舟橋前市長の時代は、議会以外での対話や交流などよく行われていたと聞きます。そのような場で舟橋前市長は議員の要求を聞き入れたり、市側の要求を議員に呑んで貰ったりと舟橋氏なりに努力をしていたようです。

川合市長は特定の議員との交流はあっても、他の議員との交流はほとんどありません。先の話に戻りますが、木島氏の副市長就任の一件は、議会で「否決されたら顔がつぶれる」と川合市長はあせって、新井議長に話をもちかけたのでしょうか。しかし、新井議長は市長に対して冷静な対応をしたと思います。議会最終日の運営を誤って新年度予算が成立しないような事態に陥ったら、川合市長の木島副市長就任人事案件が成立ならず、川合市長の「顔がつぶれる」どころの騒ぎではありません。市民生活に直結する当初予算より人事のための自分の顔を気にしているところを見ると、自分のことしか考えない身勝手な人間であり、市民のための市長ではないことが一目瞭然です。

副市長人事について、他の話もあります。6年間に渡って県から招いていた副市長を今回はなぜ招かないのか。川合市長と上田知事の関係がぎくしゃくしていることは半ば公然のこととされています。副市長職の県からの派遣はこの川合市長と上田知事の関係が深く関与していると見る者も少なくありません。上田知事との関係が冷え切っているために、県からの副市長職の派遣はないものと考えた方が良さそうです。県との関係が旨く行かないと川越市の行政は後退します。川合市長はオリンピックについても積極性を欠いています。冷静さを欠き、直ぐカッとして浅はかな行動を取る性格に関係者は失望しているのが現状です。上田知事は川合市長の行政運営を見透かしているのでしょう。

今回の人事では風間副市長の関与も薄く、川合市長自らが末端職員の処遇を自ら行った世紀末人事と言われています。

ある課などは、部長が定年、課長・副課長・担当までもが一挙に異動という事態に陥っています。業務の継続性など全く考えない人事となっており内部からは、「どうなっているんだ」という声が上がっているところです。

農政課においては、課長・副課長・主幹という責任者3人が3人とも退職。この農政課の課長は定年まで残り1年なのですが退職してしまいました。課長は去年の4月に農政課長として異動になってきたのですから、記憶にまだ新しい放射能に汚染された狭山茶問題に関しては、この課長の直接的な失態ではないのです。

しかし、川合市長は「自分は何も聞いていない」「間違えていない」「悪いのは現場」と自分の部下を擁護することもなく責任を農政課に押し付けていたようです。それに呆れた課長は、川合市長に嫌気がさしての退職ではないのか。と皆一様に蔭で囁いています。

川合市長が軽率な態度や発言を繰り返すのは、今に始まったことではありません。市議や執行部も周知しているように、川合市長は度々失態を演じてきました。

今年の3月議会での話です。日本共産党 本山修一議員の質疑のときに、川合市長が「教育再生首長会議」という組織に参加していることが分かりました。

「教育再生首長会議は、どのようなもので、どのような経過で加入したのか。」と本山議員は川合市長に質します。川合市長は「教育再生首長会議とは、教育再生の先導的役割を率先して果たすことを目的に、平成26年6月2日に設立され、平成27年1月27日現在、自治体の首長80名が加入していると伺っております。教育再生首長会議の会長である松浦防府市長からお誘いがありまして会議のメンバーになったものでございます」と答弁。

これに対し本山議員は「教育再生首長会議の規約に教科書採択に関する調査研究と書いてあるが、教育の内容に介入するような、懸念を思わせるようなことが書かれている。さらに安倍首相に提出した10の提言の中に、教育再生首長会議の事務局団体は、懲戒処分を含めた小中学校の組織的ルール作り、教職員団体の健全化、歴史の光を伝える教育への転換など、極めて戦前を思わせるような内容を申し入られている。教育委員会制度の改変・改訂が行われていく時期にあたって、首長がこのような団体に入られていること事態が、問題ないのか」と再び質します。これは共産党が道徳教育を否定するための発言です。

その質問に対して川合市長は問題発言をしたのでした。

川合市長は「このような団体にいるのはいかがなものかという点につきましては、軍歌を歌うからといって即、右翼というふうに見られるものでもない、それと同じであるというふう

に答弁しておきます」と答弁を行いました。

この答弁は問題です。問題とは共産主義政党議員との質疑応答に、思想的に対立する側の名称を材料にあげ、あたかもその名称を嘲笑するかの川合市長の答弁は、地方公共団体の意思決定機関としての議会を軽視しています。

これまでも上から目線で、他者を馬鹿にするような発言は多々ありましたが、今回は「右翼」の立場にいる人たちまでも揶揄する始末です。右翼思想も長い歴史の中で日本に息づく保守的な思想だと思います。左翼を前に右翼を揶揄する発言は、政治家たる市長の発言としては最低なものです。川合市長の認識では、一般に軍歌を歌う輩は右翼であると言っており、自分は右翼ではないという言い回しの中に「右翼」全体を馬鹿にしている発言だと考えられます。

この後、同じ共産党の柿田議員が市長の発言に対し異論を唱え、市長は共産党議員に謝罪しました。

「右翼」を自称する人間の中にも軍歌を歌わない人間もいます。また「右翼」ではないが軍歌が好きで歌う人間もいます。今回の市長の発言は、右翼と呼ばれている愛国者団体、軍歌を歌う人に対して頭から馬鹿にする発言であったと思います。また「教育再生首長会議」の存在も安易な川合発言によって「軍歌・右翼」という右よりの思想的方向に立つ組織のごとくに思われます。柿田議員の指摘に対して市長は謝罪しましたが、この謝罪は川越市議会の中での話であって、謝罪した相手は本山議員と柿田議員、もしくはその議会の場にいた人間のみであります。「右翼と呼ばれる人間」や「右翼だが軍歌を歌わない人間」、「右翼ではないが軍歌を歌う人間」、このような人達に対しての謝罪は、未だないようです。広報川越を通じて全国の右翼の皆さんに謝罪しなければ片手落ちだと思うのです。左翼と右翼の思想闘争史には長い歴史があります。双方主張を譲りません。私達の間から見ても左が正しく右が間違いだとは言いきることはできません。

川合市長は議会答弁で共産党市議を前に右翼の位置を揶揄して共産党に媚び、あげくに、左翼政党に頭を下げ、揶揄した右翼の立場を放置するとなると私達平凡な市民でさえ、川合市長という人間の心の置き方が見えてくるのです。川合市長は人生の勉強が足りないと同期の人が語っていました。川合市長は法律的な面はプロであっても、左・右闘争の近代史に対する認識を全く欠いています。

川合市長にしてみれば、議会の中でのことと逃げるのかもしれませんが、この発言は議会の本会議中なので議事録に残り、後世に伝えられて行くものなのです。川越市長は実に軽薄な人物ですね。一人の人間として川合市長は川越市を代表する人物として言葉の重み、言葉の意味の大切さをもっと学んでもらいたいものです。

失態続きの市長に、川越を任せていて大丈夫なのかと考えているところです。川越市民は、未だに川合市長とはどのような人物なのか理解していない人が大勢います。川越市は本当に情けない市と成り果ててしまいました。

最後になりましたが、私は時折、御社に投書している者です。私の投書が的を射ていないのか、単に駄文であるためなのか、行政調査新聞社のHPの「読者投稿」を見るたびに自分の投書が掲載されていないことを淋しく思っています。けれども市民の生の声を載せて下さるのは貴紙のネットだけです。応援しています。

川越の一市民より